

息子よ！ 天国から届いた 「ありがとうカード」

遺品の中から見つかった亡き息子からのメッセージ——
たった一言の「ありがとう」は、残された家族にとって唯一無二の宝物になった



啓樹さんの遺品整理中に見つかった「心にのこるありがとうカード」

二〇一一(平成23)年三月一日午後二時四六分、東日本大震災が発生。日を追うごとに死者の数は増え続け、各地に遺体安置所が設けられた。仙台市宮城野区に住む高澤安志さんと啓樹さんは、長男の啓樹さんを探していた。いくつもの遺体安置所を尋ねまわり、啓樹さんを見つけたのは震災から一週間後。享年三三歳だった。

募る複雑な思い

啓樹さんは、パチンコ・飲食事業などを手がける株式会社ベガスベガスに就職し、名取店のサブマネージャーとして働いていた。震災当日は夕方からの勤務だったが、地震発生を受け、早めに出勤。帰る手段を失った客を自分の車で送り届けてあげようと、海岸に近い閑上方面に向かったまま、行方が分からなくなっていた。

啓樹さんは大学時代、具合が悪くても決して講義を休まず、二年生のときに卒業に必要なすべての単位を取得してしまうほど、真面目で忍耐強かった。震災当日の行動について、「進んで仕事を引き受ける啓樹らしい」と思いながら、何とか止める手段はなかったのか、高澤さん夫妻は複雑な思いを抱えている。

実は、安志さんは啓樹さんから一度だけ会社を辞めたいと相談されたことがある。理由を聞くと、人間関係に悩み、同業他社に転職したいという。一つの会社で一〇年働かなければ仕事は覚えないと考えていた安志さんは、「どこに行っても自分と合わない人はいる。それを乗り越えないと駄目だよ。その代わり、一〇年働いて、どうしても嫌なら辞めていい」と説き、辞めさせなかった。その一〇年目が震災の翌月だった。

人間関係の悩みを乗り越え、転勤先の名取店でサブマネージャーとなり、父親の助言に感謝していた啓樹さん。それでも、あのまま辞めさせていればという思いは安志さんを追い詰めた。

「時間を守れ。約束を守れ。挨拶をしろ」